

まえがき

皆さんは、学校の授業で古典を学んで——とくに文法を——、首をかしげたことがないだろうか。学んだとおりに現代語訳したのに、市販の訳本とは同じ訳にならないことに。あるいは、文法の知識を頭に詰め込んだはずなのに、直訳すらもままならないことに。

単語や背景的な知識の量によって読解の能力は大きく左右されるが、長年、教壇に立ち古文を教えてきた身として、「訳す力」を身につけるための文法、というものを日々探求する中で、本書が生まれた。

本書は、まずは高校で学んだ古典文法の演習問題からはじめ、一般的な参考書にあるような基礎的な内容のおさらいができるように設計した。そして、訳すための具体的な知識や、それぞれの用語や文法項目が先学でどのように唱えられてきたかについて、「講義」で学べることに特徴がある。「発展」では、初学者から専門家への橋渡しとして、さらに一歩進んだ内容を用意した。

読者として、大学の専攻で古典語を学ぶ方や、古典作品を扱う方（学問の分野的には「日本語学」「日本文学」で括れる）を対象とした。また、国語教員の方（あるいは教員を目指す方）、古典に興味があつて学びなおしたい方などが、大人になってからのワークブックとして新鮮に感じてくださるのなら、喜ばしいことこの上ない。

本書を成すにあたっては、これまで私を導いてくださった國學院大學の先生方をはじめとして多くの方に感謝しなければならぬが、今回特に、細やかな確認や、新しい情報提供をいただいた國學院大學教授の吉田永弘氏、高知大学准教授の北崎勇帆氏、國學院大學兼任講師の梅村玲美氏には、心からお礼申し上げます。また、くろしお出版の藪本祐子氏には面倒をかけるばかりで、ここにお名前を記すことで、感謝の一端としたい。

令和四年 十月十日

紙尾 康彦

凡例

●古文からの用例について

・用例については、小学館から刊行されている『新編 日本古典文学全集』（以下、「新全集」とする）から採取した。表記は適宜改めたところがある。出典の表示法は次のとおりである。

ア 「新全集」において、その作品が一冊に収められているものは「作品名」「頁」「行」の順番で示した。

例…更級日記 279・5

イ 「新全集」において、その作品が二冊以上に渡っているものは「作品名」「巻名」「頁」「行」の順番で示した。

例…源氏物語・桐壺 44・1

※なお、『今昔物語集』と『狭衣物語』は、巻名（説話名）の代わりに（「新全集」の巻数ではなく）実際の巻数を示した。

例…今昔物語集・巻二 937・14

・和歌については、『万葉集』『古今集』『新古今集』は「新全集」の歌番号を付し、その他の和歌は『新編 国歌大観』（角川書店刊）の歌番号を付した（なお、『古今集』の仮名序は「頁」「行」を示した）。

・用例にはできるだけ現代語訳を付した。本書の趣旨から、いわゆる「なめらかな訳」（意訳）より「直訳」を優先した（「新全集」の訳を採用していないものも多い）。

●「講義」「発展」で扱った書籍・論文について

出典情報については、原則、該当箇所逐一一記す形とし、再録されているものはそちらの方だけを挙げたものもある。また引用に際しては、適宜、旧字体から新字体への表記変更、傍線・傍点等の強調を施したり、（ ）で補ったりした所がある。

●時代表記について

時代表記を行う際、以下の「」のように示す場合がある。対応するおおよその時代区分を示す。

「上代」…奈良時代 「中古」…平安時代 「中世」…鎌倉・室町時代 「近世」…江戸時代 「近代」…明治時代以降

目次

自分で読むための 基礎 日本古典語

まえがき・凡例

第一講

五十音図といろは歌・仮名遣いと読み方…………… 1
講義…………… 2

発展一 文字の獲得 4／発展二 五十音図といろは歌 5
発展三 八行転呼 6／発展四 母音の連続による長音化 7

第二講

文節と品詞…………… 9
講義…………… 11

発展一 文節 15／発展二 連文節 16／発展三 品詞 17

第三講

活用と活用形…………… 18
講義…………… 19

発展 活用と活用形の歴史 21

第四講

動詞総論…………… 22
講義…………… 23

発展 動詞概説 26

第五講

動詞各論1―正格活用…………… 28
講義…………… 30

第六講

動詞各論2―一段活用…………… 32
講義…………… 33

第七講

動詞各論3―変格活用…………… 34
講義…………… 36

発展 ラ変「あり」の扱われ方 37

第八講

動詞各論4―音便・補助動詞・自動詞と他動詞…………… 39
講義…………… 40

第九講

形容詞1…………… 43
講義…………… 45

発展 形容詞の歴史 47

第十講

形容詞2―語幹の用法・音便・特殊な形容詞…………… 49
講義…………… 50

第十一講

形容動詞

講義

発展 形容動詞の定義と立場 56

54 53

第十二講

助動詞総論

講義

発展 助動詞概説 63

60 58

第十三講

助動詞各論1

未然形に付く助動詞①「る・らる・す・さす・しむ」

講義

発展 「る・らる・す・さす・しむ」 71

66 65

第十四講

助動詞各論2

未然形に付く助動詞②「むず・む・ず・じ・まし・まほし」

講義

発展 「む・まし」 79

73 72

第十五講

助動詞各論3

連用形に付く助動詞「き・けり・つ・ぬ・たり・けむ・たし」

講義

発展 時制 88

83 81

第十六講

助動詞各論4

終止形に付く助動詞「まじ・めり・なり・らむ・らし・べし」

講義

発展一 「なり」伝聞・推定小考 99

発展二 「らむ」はなぜ終止形接続なのか 99

94 91

第十七講

助動詞各論5

連体形などに付く助動詞「なり・たり・ことし」・変則的な接続の助動詞「り」

講義

発展 上代特殊仮名遣い 106

103 101

第十八講

助詞総論・助詞各論1 格助詞

講義

発展一 助詞の分類 117 / 発展二 「が・の」 118

112 109

第十九講

助詞各論2 接続助詞

講義

122 120

第二十講

助詞各論3 係助詞

講義

130 128

第二十一講

助詞各論4 副助詞・終助詞・間投助詞

講義

140 138

第三十二講

敬語総論——敬意の方向による分類——
149

講義
151

発展 接頭語「御」と丁寧語「ます」の歴史
156

第三十三講

敬語各論——二方面への敬意・敬意の高低・謙讓語Ⅱ類——
157

講義
160

発展 『敬語の指針』において「美化語」という項目を立てた理由
163

第三十四講

敬語各論——最高敬語・絶対敬語・自敬表現——
164

講義
167

第三十五講

紛らわしい語の識別
170

講義
176

別冊・演習問題 解答・解説

第一講

五十音図といろは歌・仮名遣いと読み方

① 五十音図を平仮名と片仮名で書きなさい。

									あ

									ア

② 次の「」に適語句を補いなさい。

五十音図の縦の列（あいうえお・かきくけこ…）を「
 と言い、横の列（あかさたな…いきしちに…）を「
 言う。したがって、「に」は「
 の「
 」にある
 ということになる。

③ 「や・ら・シ・ツ・ヲ」を正しい書き順・正しい字体で書きな
 さい。 「
 「
 「
 「
 「
 「

④ 「いろは歌」の次の「」に適切な文字を歴史的仮名遣いで入
 れなさい。

いろ「」にほ「」と ちりぬる「」
 色「」句「」ど 散りぬる「」
 わかよたれそ つねなら「」
 我が世誰そ 常なら「」
 う「」のおくやま け「」こ「」て

有為の奥山 今日越【】て
あさぎゆめみし【】もせず
浅き夢見じ 醉【】もせず

5 歴史的仮名遣いで書かれた次の①～⑮の語の読みを、現代仮名遣いの平仮名で書きなさい。

- ① あはれなり【】
② わづらひたまふ【】
③ おまへ【】
④ にほふ【】
⑤ をみなへし【】
⑥ ゑんず【】
⑦ あぢきなし【】
⑧ いうなり【】
⑨ えうなし【】
⑩ さうざうし【】
⑪ をかし【】
⑫ てふてふ【】

⑬ けふ【】
⑭ くもる【】
⑮ ちゆうしうの月【】の月

6 次の文章を読み【】に適語句を補いなさい。

「手水」という語は、「てみづ」と書いて、もとはそのように読まれたものと思われる。しかし、「てみづ」の「み」の部分が、おそらく「ん」という音になり、さらにそれが「う」になることによって「てうづ」と書かれ【】と読まれるようになったのである。「兄人」も「せひと」と書いて、そのように読まれていたと思われるが、「ひ」の部分が「う」という音になったために「せうと」と書かれ【】と読まれるようになった。

講義

一、「平仮名」の成立

平仮名は、漢字をくずしてできたものである。楷書とは異なる書き順のものもあるが、もとの漢字を意識して書くことが重要である。

「あ」から順にもとになった漢字を示すと、次のようになる。

安 以 宇 衣 於 加 幾 久 計 己
左 之 寸 世 曾 太 知 洲 天 止

奈 仁 奴 祢 乃 波 比 不 部 保
末 美 武 女 毛 也 ● 由 ● 与
良 利 留 礼 呂 和 為 ● 惠 遠

なお、*を付した「洲」は一般的には「川」をあてる。しかし、「川」という文字に「つ」という読みはない。意味的に「津」と同じだから「川」をあてたなどという説もあるようだが、「つ」という音

を持たない文字が「つ」として定着することは考えにくい。古代の「と」の発音は「ツア(tsa)」であるとすると説が有力であるが、「す」も同じ子音だとすると、「洲」は「ツ」と発音していて、それが残り、「洲」を「つ」にあてたと考える説が合理的なので、ここでは「洲」を採る。

●の部分(ヤ行のイとエ、ワ行のウ)は、もとは、[j] [je] ([j]は、ヤ行の音、[wu]の発音であり、ア行と異なる発音であったとも考えることができるが、文献資料では見ることができない。古くからア行の「イ・エ・ウ」と同じ文字で表記されている。青谿書屋本『土佐日記』(藤原為家が、貫之自筆本を忠実に写したという識語を持つ)では、ヤ行の「エ」(たとえば「見えず」の「え」)を「へ」とするが、これは、為家がヤ行の「エ」を表す「江」のくずしを理解できなかったものと池田亀鑑は考え、ヤ行の「エ」は独自の音を持ち、ア行の「エ」とは区別されていた可能性を説いた(『古典的批判的処置に関する研究』1922年、岩波書店)。

*を付した「部」は、「ㄆ」のくずししたものと言われているが、「辺・皿」のくずしという説もある。『金光明最勝王経音義』(承暦三1069年書写。「発展二」参照)を見ると、「反」という字とも考えられる。

二、片仮名の成立

片仮名は、漢字の一部分を取ったものである。順に示すと次のようになる。どの部分を取ったか、考えてみよう。

阿	伊	宇	江	於	加	幾	久	介	己
散	之	須	世	曾	多	千	洲	天	止
奈	二	奴	祢	乃	八	比	不	部	保
万	三	牟	女	毛	也	●	由	●	与
良	利	流	礼	呂	和	井	●	恵	乎

なお、「ケ」は「个」、「ヘ」は「辺・皿」、「マ」は「末」、「エ」は「慧」、「井」は「韋」とあるという説もある。なお、●は、平仮名同様、文献資料には見られないものである。いずれにしろ、漢字がもたっているもので、もとの漢字の形がわかるような字形になっているということを知っておくとよい。

三、平安時代と現代の発音

同じ仮名でも平安時代と現代では発音が異なるものがある。たとえば、ハ行の子音は[p]であったと言われている(上田万年「p音考」↓「発展三」参照)が、たとえば、「はは」をその当時の発音に従って「ばば」と読むと、現代人は何を言っているのかわからなくなってしまう。そこで現代語とほぼ同じ発音になった一八世紀中ごろの本居宣長などの国学者が読んでいたように、私たちも発音することにする。ただ、松坂の人である宣長はどちらかと言うと関西よりの方言なので、標準的な東京の言葉とは異なる所がある。たとえば、動詞「買ふ」は、次の四節のルールからすると、「こう(こー)」と読むことになり、そのように指導することもあったが、一般には「かう」と言う方がわかりやすいので、それでもよいと思われる。

四、読み方の変遷・ルール

読み方の変遷・ルールを紹介する。

①ワ行の「あ・ゑ・を」は、一三世紀から一四世紀にかけて、ア行の「い・え・お」と同じ発音になった。ただし、「え・お」の発音は、それぞれ[je] [wo]であったと考えられており、江戸時代になって現代語の発音[e] [o]になったと言われている。

②母音が「う」に続く場合は次のように読む。

あう↓お(おー) いう↓ゆう(ゆー)

えう↓よう(よー) おう↓おう(おー)

右の(一)内が実際の読み方で、それを現代仮名遣いにしたものがその上に書いたものである。なお、ワ行「ゐ・ゑ・を」に「う」が続く「ゐう・ゑう・をう」も「ゆう・よう・おう」となる。

③ 語中語尾のハ行音は、ワ行音で読む。これをハ行転呼と呼ぶ。

この現象は、平安時代から行われている(「発展三」参照)。

例…いは↓いわ(岩)

かひ↓かゐ↓(①によって) かい(甲斐)

ぬふ↓ぬう(縫) いへ↓いゑ↓(①によって) いえ(家)

かほ↓かを↓(①によって) かお(顔)

二つの語が合わさってできている語(これを複合語と言う)では、その後の語の先頭のハ行音は、そのままハ行音で読む。たとえば、「はつはる(初春)」は「はつわる」ではなく、「はつはる」、「あさひ」は「あさい」ではなく「あさひ」という具合である。

その他にも例外がある。「あふひ」は「あおい(葵)」と読み、「おうい」とはならない。「たふる(倒る)」も「たおる」と読み、「とうる」とは読まない、などである。

発展一 文字の獲得

日本人はもともと文字を持っていないと言われている。中国から入ってきた漢字を、日本語の音(音節)を表すための記号として用いるようになる。たとえば、「山」を「^{ヤマ}耶麻」、「八間」などと表記した。前者が、漢字の音を利用したもので、後者が、漢字の訓を利用したものである。漢字の意味は関係ないことがわかるだろう。最初は、右のように一音節に一字をあてたと思われる。一字で一音を表すと決めておけば、大きな誤解もなく、意味が伝わることになる。『古事記』にはこのようなものが多い。ただ、これは、全文体を平仮名で書き表すようなもので、平仮名だけの文章は本当に読みにくいし、書く方も手間がかかる。そこで、一字で二音節以上を表すようになったり、漢字本来の用法(音の他に意味をも表す)も織り交ぜて書き表すようになっていく。たとえば、

「なつかし」を「夏樫」、「思ひつるかも」を「念鶴鴨」と表したり、「やま」を「山」のように表したりするのである。また、「憎く」を「二八十一」(九×九＝八十一)だから、八十一の部分で「くく」と読ませる)、「出づ」を「山上復有山」(「山」+「山」＝「出」)のように、ふざけて書いたと思いたくなるようなものもある。このような用法も含めて、最も多彩な表記法を持つ『万葉集』から名を取って、仮名として漢字を用いるものを「万葉仮名」と呼ぶ。

ところで、漢字は、画数の多いものもあり、一画ずつ丁寧に表記すると手間がかかる。そこで、日本人はこれを、草体(くずし書き)と連綿体(続け書き)とによって、簡略化していくのであるが、わかりやすく、よく使われるものが固定化していくのは自然なことであり、もとの漢字

がわからなくても読めるようになっていく。このように漢字から独立して表音文字となったものが「仮名（平仮名）」である。和歌や女性の私的文章に用いられた。

一方また、漢文・漢詩を読む際には、レ点のような訓点の他に、ふり仮名・送り仮名・助詞・助動詞などを書き添えた方がわかりやすい。その時に、漢字を万葉仮名として用いるとどれが本文かわからなくなるし、連綿体を本文の横に書いたのでは見づらくなることは当然である。そこで、漢字の一部分を取り出して、仮名として用いたのが片仮名である。そのため、片仮名は、漢文を読むような男性や僧侶・学者が主に用いた。

発展二 五十音図といろは歌

五十音図は、古くは「五音」などと呼ばれた。經典の悉曇（しつだん）リット）研究のためとか、漢字音の反切（はんせつ）を理解するために作成されたとされている。「反切」というのは、漢字の発音を示すものである。ある漢字の発音は、二つの漢字を並べて、最初の漢字の子音と後の漢字の母音（最初の子音より後）の部分とを組み合わせたものとなる（例：天泰 豎反（「天は泰豎の反」と読み、ai・o・eのiとoを取ってtoという読みを表す）。現存最古の五音は、『金光明最勝王經音義』（承暦三・1076年 書写）と言われている。それより以前には『孔雀經音義』（醍醐寺蔵、1004～1028頃成）に見られるが、全部の行が揃っていないので『金光明最勝王經音義』（「音義」というのは、そのお経などの読み方を示すもの）を最古とする。

ちなみに、片仮名以前は、漢字の一部分に「・」のような点を打ち、漢字のどこにその点が打ってあったら何と読むかを決めて用いていた。これを「ヨコト点」と言う。片仮名から比べると遥かに不便であることは一目瞭然であろう。

平仮名も片仮名も、一つの音節に対して複数の文字があったが、その中で現在私たちが用いているものは、明治三三（1900）年の「小学校令施行規則」で定められたものである。また、それ以外の仮名を、変体仮名と呼んでいる。

参考 小林芳規『図説日本の漢字』1988年、大修館書店刊

いろは歌は、同じ文字が重複しないように、『涅槃經』の偈「諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為樂」に基づいて仏教思想を詠んだものとされている。いろは歌も四七文字である。現在の歴史的仮名遣いと同じである。誰が作成したかは不明であるが、現存最古のいろは歌も、『金光明最勝王經音義』に万葉仮名で見られるものである。古辞書の見出し語もいろは順になっているものがほとんどである。

ところで、平安時代一〇世紀前半までは、ヤ行の工段は、ア行の工段の発音とは別であったとされる。それは、『源順集』（天曆四950年前後成）にある四八首の和歌による。この和歌は、ある文字から始めると、最後が同じ文字になっている（沓冠くわくかんと言う）ものであり、次のようなものである。

あらさじと　うちかへすらし　をやまだの

苗代水に　ぬれて作るあ

(最後の「あ」は畔の意か)

めも遙はるに　雪間も青く　なりにけり

今こそ野辺に　若菜摘みてめ

つくば山　咲ける桜の　匂ひなは

入りて折らねど　よそながら見つ

ちぐさにも　ほころぶ花の　繁きかな

いづら青柳　縫ひし糸すぢ

《中略》

*えも言はで　恋ひのみまさる　我が身かな

いつとや岩に　生おふる松が枝

のこりなく　落つる涙は　つゆけきを

いづら結びし　草むらのしの

*えも堰かぬ　涙の川の　はてはてや

しひて恋しき　山は筑波え

(最後の「え」は格助詞「ヨリ・カラ」の意か)

をぐら山　おぼつかなくも　あひ見ぬか

鳴く鹿ばかり　恋ひしきものを

発展三　ハ行転呼

上代のハ行の子音は、[p]であったと言われている。それが平安時代に

なきたむる　涙は袖に　満つしほの

ひる間にだにも　あひ見てしがな

れふしにも　あらぬ我こそ　遭ふことを

ともしの松の　燃え焦がれぬれ

ゐても恋ひ　臥しても恋ふる　かひもなく

かげあましく　見ゆる山のゐ

てる月も　漏るる板間の　あはぬ夜は

濡れこそまされ　かへす衣手

*を付した二首が問題である。「え」が重複しているのを確認してほしい。単なるミスであろうか。場所が離れているのならいざ知らず、二つ後に同じ文字を置くというのは、意図的なものと考えた方がよさそうである。もし、これが、何らかの音韻現象を表しているとするならば、「え」の一つをや行の「え」とし、ア行とヤ行の「エ」の異なる発音の名残とするのが、「講義」一節の池田亀鑑の解釈などからしても妥当だということになる。

参考

亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編『日本語の歴史2』2007年、平凡社ライブラリー

小松英雄『いろはうた―日本語史へのいざない―』2009年、講談社学術文庫

馬淵和夫『五十音図の話』1993年、大修館書店刊

なると、[ɸ]（ファ・フィ・フ・フェ・フォのような発音）になる。破裂音

[p]が、破裂をやめて両唇摩擦音になったことである。この [p] を語中・語尾で発音しようとする、かなり手間を取るようになる。そこで [ɸ] を [w] のようにして唇の摩擦を軽減するのである。このことを、八行転呼と呼ぶ。したがって、語中・語尾の八行音は、ワ行音で読むことになる。さらに、ワ行のイ段音、エ段音、オ段音が、ア行のそれぞれの音と同じになったために、「は」を除いて、ア行と同じになる。

なお、京都では、語頭の [ɸ] 音は平安時代から江戸時代初期まで続いたと考えられている。その根拠として次のような事柄が挙げられる。

- ・母には二度会ひて父には一度も会はず」という謎立ての答えが「唇」となっている。
(後奈良院御撰『何曾』永正一三T516成)
- ・室町時代末期のキリシタン資料では、「Fatio (鳩)・Fio (人)」のよ

発展四 母音の連続による長音化

漢字音の中には、「やう(様)・えう(要)」のような母音の連続があったが、日本語(=倭語)にはもともと、母音が連続することはないと言われている。ところが、八行転呼という現象が起きると、「いへ」↓(「いゑ」↓)「いえ」のように、母音が連続することになった。最初はそのまま二つの母音を一つずつ発音したと考えられるが、その中で、母音の下に「ウ」の付いたものについては、長音にすることが行われた。「アウ・オウ・エウ」は才段の長音に、「イウ」はウ段長音になる。たとえば、「やう・よう・えう」は「ヨ」^ウとなる。

才段長音については、「アウ」は口を開き気味の「アー」に近い

うに、八行を表すのに「F」という文字をあてている。

*キリシタン資料というのは、16世紀後半に渡来したキリスト教徒(主にポルトガル人)が、日本語を学ぶために、日本語をポルトガル式ローマ字で表記したり、ポルトガル語で解説したりしているものである。

- ・八行の発音を、「ふを母字に置いて一音に唱ふ事なり」として、「フハ・フヒ・フヘ・フホ」と発音するようにという記述がある。

(三浦庚康『音曲玉淵集』享保一三T27刊)

最後の謡曲の謡い方を示した『音曲玉淵集』は、江戸で刊行されているが、このような注を施す必要があったということは、享保頃の江戸では、現代語のような八行音になっていたとも考えられるものである。

参考 上田万年「p音考」『日本語の起源と歴史を探る』1994年、新人物往来社に再録

「オー」で、「ヨウ」と「エウ」は口を閉じ気味の「オー」であったと考えられている。それは、キリシタン資料で、同じ「オー」であっても、「アウ」から変化したものは「ō」、「ヨウ・エウ」を表す場合は「ō」のように別表記になっていることなどからわかることである。「ウ」の前に母音「ア」があって「オー」となるものを「開音」、「ウ」の前に母音「ア」以外の母音があって「オー」となるものを「合音」と言う。才段長音の「開合」というこの別を指しているということになる。

ところで、八行転呼が起きるとどうなるか。たとえば、「若」は、「いは」と表記していたのだが、八行転呼が起きると、発音どおり「いわ

とも表記するようになる。つまり、「岩」は、「いは」でも「いわ」でもよくなってしまふのである。どちらでもよいという表記は、もとの表記をわからなくしてしまふ。鎌倉時代には表記がかなり乱れていたようで、藤原定家（応保二一〇二〜仁治二一二四）は『下官集』で、平安時代の仮名文書に基づいて仮名遣いを定めた。それを大幅に増補したのが、行阿ぎやうあによる『仮名文字遣』（貞治二一三三年以后成立）である。これらをまとめて「定家仮名遣い」と呼んでいる。中世以降、和歌・連歌などで広く重用された。ただ、この仮名遣いの大きな欠点は、平安時代の文書の中でも、仮名遣いが乱れてしまった頃の資料を用いてしまったことである。正しい仮名遣いとは言えないものが多く混ざっていた。

江戸時代になって、これを糺ただしたのが契沖けいちゅう（寛永一七二のち〜元禄一四一七〇）の『和字正鑑鈔』（元禄八一〇〇五年刊）である。八行転呼以前の古い資料を用いて仮名遣いを定めた。これを楳取魚彦かどりのなびこが『古言梯』（明和二一七六五年刊）で補訂した。この仮名遣いが、後に「歴史的仮名遣い」として採用されることになる。ただ、これも、ア行の「お」とワ行の「を」の位置が逆（すなわち、ア行が「を」で、ワ行が「お」であった。本居宣長もとゐりのりながは『字音仮字用格』（安永五二一七〇九年刊）で訂正するが、普及しなかった。現在、われわれはそれを直した上で歴史的仮名遣いとして用いている。